

六^む連^{れん}銭^{せん}

創刊号



地黄八幡旗指物

真田宝物館蔵

平成八年度
特別展

真田幸貫とその時代

九月二十六日(木)～十一月十一日(月)



江戸時代の後半、幕府の支配は、社会・経済・政治といった様々な方面から崩壊が始まります。そしてその建て直しのため、幕府は享保・寛政と政治改革をおし進めました。諸藩でも同じ頃、それぞれ藩政改革をおこなっていましたが、あまりよい成果はあがりませんでした。こうした時代に、松代藩八代藩主となったのが、真田幸貫でした。幸貫は寛政の改

革をおこなった松平定信の次男で、真田家に養子にはいり、文政六年(一八二三)、藩主となりました。幸貫の行なった松代の藩政改革は多岐にわたり、また幕府の老中という要職についたこともあって、全国的にみても、注目すべき点が多くみられます。今回の特別展では、この真田幸貫の業績を紹介するとともに、幸貫の生きた時代について展示します。

老中就任と東アジア情勢

真田幸貫は、天保十二年(一八四一)老中に就任し、水野忠邦とともに天保の改革を推進しました。幸貫はその見識をかわれ、対外問題処理する海防掛に起用されました。海防掛は、幸貫の実父・松平定信が、寛政四年(一七九二)ロシア船の来航に対処するため、はじめておいた職です。幸貫の就任は、その前年、清(中国)で起こったアヘン戦争に対処するためのものでした。幸貫は、佐久間象山を顧問とし、その進言により、諸外国に対抗するための沿岸警備の必要性を幕府に説きました。天保の改革が失敗し、水野忠邦が失脚すると、幸貫は老中を退きますが、内政にとどまらず、世界の体勢にも目をむけた眼力は、高く評価できるといえます。ペリーが来航し、日本が鎖国を解いたのは、幸貫の死の直後でした。

諸大名との親交

幸貫は、老中という幕府の要職に就い

ていたこともあって、様々な大名たちと交流がありました。中でも水戸藩徳川斉昭とは親交が深く、幸貫の老中就任も、斉昭の推挙があったといわれています。真田宝物館には、幸貫と斉昭の交流を物語る資料が、多数残っています。

藩政改革

幸貫は藩主になるとすぐ、藩政改革に乗り出しました。具体的には、法の整備・制定、産業の振興、兵備の強化、文教の振興などがあげられます。なかでも兵備の強化には力を入れ、佐久間象山らに砲術を学ばせたり、片井京助に新式の銃を開発させたりしています。また、幸貫は、松代で十九世紀ごろから盛んであった製糸業に目をつけ、絹・紬の専売制(「独占販売」)をしくことを目的に、産物会所を設置しました。頭取には、松代の豪商八田家を任命しています。藩は、産物会所に多額の資金を融資して、製品の買い占めと、城下の市での独占販売をさせました。文教の振興では、藩主就任直後から、幸貫が文武を奨励しています。

天保元年（一八三〇）には、藩士の子弟の教育を目的とした学校の建設を思い立ち、学校普請掛りを任命しました。これが文武学校の創始となります。こうした幸貫の学問に対する熱心な姿勢を反映して、松代藩における学問も発展しました。佐久間象山をはじめ、鎌原桐山、山寺常山、長谷川昭道などの、優れた学者が出ました。

藩政改革は、幸貫の老中就任によって中断され、さらに藩の財政が悪化したり、藩内の意見が統一できなかつたりしたために思うようにはいきませんでした。しかし、幸貫の死後、文武学校が落成し、明治時代には製糸業がさらに盛んになるなど、幸貫が改革をおこなったからこそ、その後の発展があつたともいえるでしょう。

善光寺地震

弘化四年（一八四七）三月二十四日夜、善光寺平を大地震が襲いました。これは北信を中心に、越後高田（上越市）から中信・東信にまで及ぶ大規模なもので、善光寺地震とよばれています。松代藩の領地は、そのほとんどが激震地帯にあたり、被害は非常に大きなものでした。この年はちょうど善光寺の御開帳にあたり、善光寺参りの旅人も多数巻き込まれ、死者は一万人を越えたといわれています。

幸貫は、地震と地震にともなう火災・地震・洪水などの状況を幕府に報告し、復興のための借金を願ひたり、地震の後、数年後に領内を巡視し、その被害の様子を描かせたりしています。

家臣の抗争

幸貫は藩主就任以来、佐久間象山らを登用して改革をおこなっていました。し



かし、急激な改革のため、藩の財政は窮乏し、家臣の間でも保守派と開明派とに意見がわかれ、派閥抗争が起りました。

開明派は、殖産強兵を推進する、家老恩田頼母を中心とした河原舎人・佐久間象山・山寺常山ら（恩田派）で、保守派は、家老真田志摩（桜山）を中心とした鎌原伊野右衛門、長谷川深美（昭道）ら（真田派）でした。両派の首謀的人物は、恩田派が佐久間象山、真田派が長谷川昭道であつたとみられています。幸貫の改革が挫折すると、改革を推進していた恩田派は、嘉永四年（一八五二）、退陣せざるをえなくなりました。代わつて真田派が政権を握り、翌年には幸貫も藩主を孫の幸教に譲り、ついで死去したため、真田派が、勢力をふるうようになりました。しかし、真田志摩が藩主の座を乗っ取るうとしていたという噂が広まったために、真田派は失脚し、恩田派が再び政界に復帰しました。

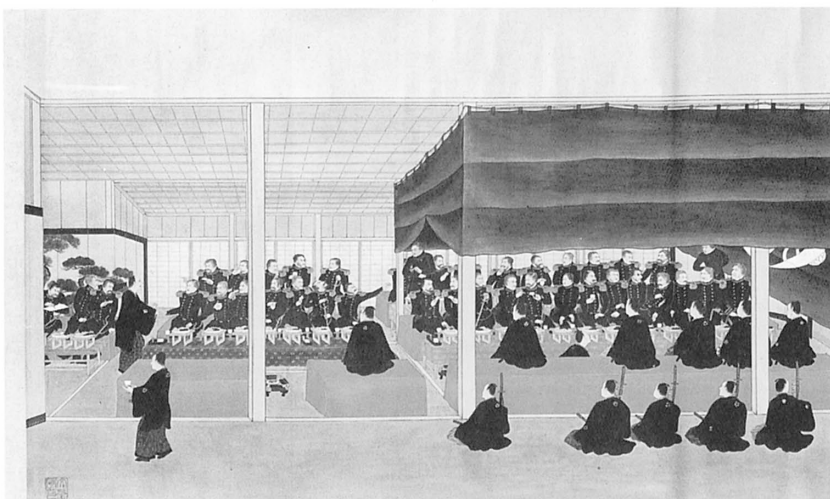
文久二年（一八六二）恩田頼母が死去すると、再度真田志摩が政権に復しましたが、両派の対立はくすぶり続けます。この抗争に終止符が打たれたのは、慶応二年（一八六六）、宇和島藩より養子にいらした幸民が、松代藩主になった時でした。

▲写真上 『感応公丁未震災後封内巡視之図』

善光寺地震の後、幸貫の領内巡視に同行した絵師によって描かれました。山崩れなど被害の様子が、描かれています。

◀写真下 『ペリ来朝絵巻 横浜応接場秘図』

ペリーが横浜に来航し、会談をおこなった後、幕府が一行を接待した宴会の場面を描いています。



松代藩文化施設管理事務所…行事のご案内

●一九九六年十月から一九九七年三月

真田宝物館

平常展示「真田家の歴史」

特別展「真田幸貴とその時代」

会期：九月二十六日～十一月十一日

会場：旧館第三～第四展示室

テーマ展示室

第三期「真田家文書の世界」

会期：十一月十三日～一月十三日

第四期「学芸員ノート」

会期：一月十五日～三月十七日

展示説明会(ギャラリートーク)

十月六日・十一月十日

十二月一日・一月五日の午後二時

象山記念館

平常展示「象山とその時代」

十月二十三日より展示がかわります。

展示説明会(ギャラリートーク)

二月二十三日・三月二十三日

いずれも午後二時から

旧横田家住宅

親子もちつき大会(事前申し込みが必要)

十二月十四日(出)

見学会 「松代町並みウオッチ」

(事前申し込みが必要)

パートIII

内容：更級・埴科地方の古仏めぐり

期日：十月十七日

パートIV

内容：更級・埴科地方の山城めぐり

期日：十二月五日

松代おもしろ

ゼミナールIV

(事前申し込みが必要)

内容：近世の北信濃の様子を、歴史学と美術史のなかからお話いたします。

期日：二月二日・二月十六日

三月二日・三月十六日

いずれも二時より

資料紹介

地黄八幡旗指物

この旗は、真田信尹のぶただが武田信玄の家臣として、北条綱成を攻め落としたとき、その戦利品として持ち帰ったものと伝えられます。

この「地黄八幡旗指物」とは、綱成の旗印のことで、朽葉色の練絹に「八幡」と墨書されていることからこの名前があります。いわば、綱成の象徴ともいえる旗といっても過言ではありません。

現在、この旗は軸装されていますが、この裏書きによれば、本来は縦六尺九寸の横三尺六寸で、上に「乳」が七つで、脇は袋状になっていたことがわかります。現在のような軸装になったのは嘉永七年(一八五四)のことです。このように軸装にしたのは、旗自身が大破に及んだためです。同時に、現品に近いかたちで、雛型(複製品)が作られました。宝物館には、この時作られたとおもわれる複製品も伝来しています。

さて、この旗を持ち帰った信尹ですが、この人は、真田昌幸の弟にあたる人物です。若い頃から武田家に仕えましたが、武田家滅亡後は、いち早く徳川家康に従っています。『寛政重修諸家譜』によれば、

慶長十九年(一六一四)に甲斐国巨摩郡に三千石を与えられ、その後千石加増されて、四千石の旗本となっていることがわかります。

真田昌幸・信繁(幸村)と、徳川家康との抗争に際しては、信尹が仲介役を果たしたとつたえられます。信尹の子孫は、その後、いくらかの変遷はあるものの、明治維新まで旗本としてつづきました。

この旗が、信尹の家に伝わらず、なぜ松代の真田家に伝わったのかはなぞです。ただ、戦国時代における真田本宗家と信尹との関係を想起すると、やはり、真田家の重品として本宗家たる昌幸に伝えられたとも考えられます。

松代藩文化施設管理事務所だより

六 連 銭 創刊号

1996年10月1日発行

編集・発行 松代藩文化施設管理事務所

〒381-12 長野市松代町松代4-1

☎(026)278-1801

題字：長野市教育長 滝沢忠男